

断絶

天正十五年三月六日、薩州島津家の出城、肥後高田（こうだ）城は大混乱であった。薩州島津家七代当主忠永（ただなが）が、島津義弘から、秀吉の軍を球磨川以北でくい止めるよう命令を受けて帰城するというのだ。高田城は八代の南、球磨川のほとりにある。

関白秀吉の度々の帰順勧告にも関わらず、去年の十一月には島津義久、義弘は豊後の大友氏を攻め、その大半を制し、勝利に湧いていたばかりである。

以前には南九州を義久に与えるという格別の条件で懐柔しようとしていた秀吉もついに業を煮やし、十二月一日、「翌年春には島津征伐を行う」と国内三十七ヶ国に号令を發し、周到な準備を命じたのだ。その数量たるや、人員三十万人の一年分の食料、馬二万匹分の飼料という膨大な量であった。

日本の端の九州から出たことのない島津義久・義弘である。未だに秀吉の気性や権勢を認識していなかった。義久には、彼の幼い頃祖父の忠良が、客人に彼を指して「この子は、やがて九州に覇をとる力量のある将となろう」と言った言葉が、深く暗示となってあった。彼らは天正十五年が明けても豊後に兵を止め、自身の勢力の拡大に努めていた。

しかし、武力で圧しても豊後の人心は島津に屈したわけではなく、何時離反するかも分からない状態であった。

一月二十五日、島津攻めの先鋒宇喜多秀家が大坂を出発したとの報が九州に入ると、足元から反乱が始まった。そしてそれはドミノ倒しのようには伝播して島津氏に刃向かった。やむなく後退を余儀なくされた義久、義弘は、三月半ば、ついに撤退して三州の国の境で秀吉軍を迎え撃とうと決めた。しかし彼らは、その退路を断つためゲリラとなって襲う土地の武士たちに悩まされることになる。結局、島津軍は彼らと戦を交えながら、辛うじて薩摩へと引き上げる羽目になってしまったのだ。

忠永は三十一才。二年前父義虎が逝去し、後を嗣いで間もなかったが、義弘に従って豊後大友攻めに参加していた。彼は秀吉軍迎撃の命を受け、主隊より一足早く豊後から肥後の高田を目指して出発した。

空は晴れていたものの冷たい春風が吹く中を、忠永は百騎ばかりの兵士を従えて阿蘇の山塊の南の山中を駆け抜けて続けて、慌ただしく高田城に入った。

高田城は居城ではないが、平地の城で小さいながら館がある。突然の帰城に、留守隊は急遽、海、山の食材を運びこむ。近辺の主だった庄屋などが慌てて挨拶に来る。女たちも忙しく走り回っている。

草鞋の紐を解いた兵士たちも、それまで寸時も気の許せなかった敵地でない気安さに快活になった。久しぶりの風呂の後には、球磨に伝わる香りの強い焼酎が振る舞われ、歌声も起こっていた。

忠永は奥の部屋にゆったりと座って、留守隊の将山崎帯刀から豊臣方の情報を聞いた。

「噂では、二陣、三陣もすでに大阪を出発の由にござります。三月一日には太閤殿下もお出ましになったとか。その兵は何十万とも、雲霞の如く堂々の進軍の由。このあたりの豪族も動揺して居りますれば、何時寝返るやも分かりませぬ」

忠永は、顔をしかめて盃を口に運んだ。大体今まで義久公の征服欲のためにどれだけの犠牲を強いられてきたことか。一昨年父上の死とて、連戦の疲労が原因なのだ。父上はまだ四十九才。働き盛りだったではないか。自分は今回は一番に豊後を出たとはいえ、今また最前線の守りを命ぜられている。明日からは迎撃の準備にかからねばならない。この戦に勝てるとは到底思えない。初めから太閤様のご意向に添っていれば、南九州は安泰であった。このような無駄な戦はしなくてもよかったのではないか。

そもそも薩州島津家は九代太守忠国の次弟用久が興した家柄である。用久は忠国を補佐した実力者であった。しかし祖父実久が、姉の夫である十四代太守勝久の後継ぎとして十五代太守を狙ったがため、義久兄弟の祖父忠良によって勢力を大きく削がれ、北薩に封じこまれた。父義虎とて最初は相良と組して義久と敵対したことがあったのだ。

山崎帯刀を下げると、忠永はたて続けに何杯も酒を煽った。日焼けした頬に剃刀を当てたばかりの青い顎が、戦場からの帰りを物語っている。酒気に赤らんだ眼差しを宙に向けて、彼は物思いに耽った。

ふと道中の敵意に満ちた人々の視線が脳裏をよぎり、頭を低くして走り抜いて来た屈辱への怒りがむらむらと湧き上がって来た。彼は手を伸ばし、かしこまって給仕に出ていたうら若い土地の娘の手をぐいと引いて、隣室に引き込むと、無言で暗闇に押し倒した。娘も覚悟していたのだろうか、一言のうめきも洩らさなかった。

翌朝、忠永は三人の間者を放ち、秀吉軍の最前線の様子を報告するよう命じた。それから居城出水の妻に手紙を書き送り、こちらの状況を知らせるとともに留守の様子を求めた。また山崎帯刀を呼び、近隣より兵士を募り、食料、武器の備蓄をするよう命じると、ふらりと縁に出て春の陽を浴びた。

昨夜の娘が静かに茶を運んで来た。ふっくらとした手を着き一礼すると、悪びれず忠永を見上げている。こうした束の間の平和は、あと一月と続くであろうか。忠永はこのひと時を深く味わうように、庭に向かって深呼吸をすると、振り向いて無言で頷いて見せた。今宵も参れとその眼は告げた。

すでに三月一日には秀吉の大軍が大阪を出立していた。一行は、黄金の千成り瓢箪の馬印も眩ばゆい秀吉は言うに及ばず、それぞれの将が、色とりどりの旗指物に、美々しい鎧を身につけて、行列を競い楽しむように

悠々と進軍して行く。途中、安芸の巖島神社に参拝し、和歌の会を催すなどと、ゆとりのある行進であった。実際トカゲをいたぶる猫のように、後の楽しみに舌なめずりをしているといった風でもあった。

海を渡ると進撃の大軍は二手に分かれ、一手は羽柴秀長が率いて日向を目指し、三月中旬には、島津軍が放棄したばかりの豊後の府内（大分）に入った。

これより先、義弘は豊後撤退の兵を二手に分け、先発の新納忠元、伊集院久春は三月十三日肥後に向かわせ、二日遅れて、島津義弘、家久、忠憐などは日向を目指した。

途中、新納忠元は、秀吉の先鋒となっていた竜造寺政家と戦端を開き、ついにその尾牟田城を攻めて抜いた。まだまだ島津の力を誇示しようとした忠元たちは、その辺の城を陥しながら、一旦隈本の周辺に踏み止まった。

一方三月二十八日、小倉城に入った秀吉の本隊十六万は、筑前より肥後を南下して薩摩へと向かった。この前代未聞の雲霞の如き大軍の威勢は、たちまち九州の豪族に伝わり、行く先々で次々と人質を出して降伏して来た。四月に入ると、まるで大きな手で撫でるように通過した国々を征服しつつ、秀吉はゆっくりと南下する。

合志、御船に踏み止まっていた島津軍は漸次後退を余儀なくされ、陣地を焼いては八代に向かった。そして島津征久、新納忠元らは八代城で合流することが出来た。

しかしその八代城も長居は危険であった。もはや敵中の孤塁という状況になっていた。四月十八日城を出た彼らは球磨川沿いに逆上って薩摩に向かった。この途中でも、地元の豪族の襲撃を受け、戦いながら漸くのことで人吉を経て、薩摩の大口にたどり着いたのは二十一日のことであった。

この島津軍の散々な撤退の様は逐次忠永に報告された。忠永はにわかにな不安になった。秀吉の先鋒隊がすぐそこまで来ているとの報も入った。高田から出水までは五十キロメートル以上はあり、途中、田之浦、津奈木、水俣を通らねばならない。下手をすると自分たちの退路も断たれてしまう。これはぐずぐずしてはおれないと忠永は思った。

四月二十日に撤退し、全員で出水に戻ることを決めた忠永は、夜な夜な、不安な日々を慰めてくれたかの娘になにがしかの永楽銭と小袖を与えた。そして十九日の夕、兵以外の使用人は城から退去させ、全軍を招集した。

高田城放棄は義弘の迎撃命令に叛くことにはなるが、大勢は明らかであるし、義弘自体日向に走っているのではないか。この上は、一人の損傷もないよう一丸となって、郷里出水に戻るほかはないと、忠永は思った。彼は集まった二百人ほどの兵に訓示した。

「明朝、この城から退去する。この度の戦は、我々の知らぬ大軍が相手である。無駄死はすまい。帰城を果たすまでは回りは全て敵と思い、油断無くまっしぐらに出水を目指し走るのじゃ。土地の者との小競り合いは無用であるぞ」

そしてまだ夜も明けぬ寅の上刻（午前三時）に、全員ひっそりと出城した。皆は無言で、ゆるい波の音や松籟を聞きながら、ひたすら海沿いの細い道や急な山道を南下するのだった。

忠永の一隊が出水城に入ったのは、真っ赤な太陽が水平線に沈み、残照が赤く空を焦がしている酉の刻（午後六時頃）であった。前日、早馬で帰城を知らせておいたので、迎えの用意は出来ていた。ただ手をついて迎える女たちの表情は何故か固かった。

玄関には妻の虎が二人の男の子、虎松丸、千代菊丸を傍らに手をついて挨拶をするが、今日は言葉少なく伏し目がちである。半年ぶりに見る子供たちも、よく陽に焼けた腕白そうな顔を緊張させている。

衣服を改め座に着いた忠永に、義母の平御前が待ちかねた様子で足早に近づき、当主帰城を迎えの挨拶をする。そしてその面も上げずに涙を拭うのだった。

「忠隣（ただちか）が討死いたしましたでございます」

嗚咽をこらえてそれだけをやっと言うと、たまらず泣き伏した。忠隣は忠永の弟で、大守島津義久の弟歳久の養子となっていたが、本隊と共に日向に撤退していた筈だ。

忠永は立ち上がって平御前の手を取ると、抱き起こして隣室に下がらせた。

留守の将、野田正澄が報告する。忠隣の戦死の報は、一刻ほど前にもたらされたばかりであった。

それによると、十七日夜、島津軍は日向の根白坂の秀長軍を襲撃し、砦を一度は奪った。しかし翌日は援軍が小早川隆景の軍を先頭に大挙して襲い、大激突の後に敗退した。忠隣の活躍は目ざましく奮迅の働きをしたが、流れ弾が腹部に命中してしまった。傷口からは滝のように出血して、彼は家来にしきりに水を求めた。戦乱の中、家来が近くの青梅を一枝引き折って差し出すと、一噛みして息を引き取ったという。まだ十七才（満十五才）の若さであった。

弟の悲惨な最期を聞いて、忠永も涙を拭った。この戦国の世で、死は隣り合わせとはいえ若者の死は痛ましい。ましてや幼い頃から可愛がってきた弟である。

祖父実久は、長らく前の大守勝久、先代大守貴久と対立して戦って来た。父義虎は、敗退して出水に引きこもった祖父の死後、十七才で後を継いだ。義虎は、妻に人吉城主相良義陽の娘を迎えて忠永が生まれた。しかし永禄年間、相良氏は菱刈氏を援け島津の敵となったのだ。やむなく義虎の妻は城を去った。彼女には菱刈の内山野に二千石の化粧料地があったのでそこに去ったのだった。

元龜元年、最後まで島津氏に抵抗していた渋谷氏が降伏した後、義虎は渋谷氏の所領の内から、川内川の北部を与えられ、大守義久の嫡女平御前

との婚儀もとり行われたのだった。長年の渋谷氏との抗争に対する賞であった。忠永十四才のときである。そしてその年には忠永の元服も行われた。

平御前は、母と言っても忠永より三才年上でしかない。鹿児島からはるばる出水に嫁いできた平に、忠永は姉のような親しみを持ったし、平も十七も年の離れた夫よりも、話しやすい忠永を可愛がり話し相手にした。

義虎と平の間には、翌年忠隣が生まれ、その後も三男一女と五人の子に恵まれていた。義久の弟歳久には男の子がなかったため、忠隣を養子として、歳久の娘の蓮を娶わせることに決められたのは、義虎の存命中であった。そしてその婚儀も昨秋行われたばかりである。蓮は二才年上の十九才。これからが華という時に、はや未亡人である。

後の話になるが、実はこの時、蓮は忠隣の子を妊もっていた。生まれた子は男の子で袈裟菊丸と名付けられた。文禄二年、歳久が秀吉の命によって悲劇的最期を遂げることになるが、その後蓮と袈裟菊丸は、歳久の従兄清色城主入来院重嗣の養子、入来院重時に預けられた。義久は細川幽齋に取次を頼み、塔之原三百石を袈裟菊丸に馬飼料として与えることを許してもらった。そして蓮は入来院重時の後妻となったのだった。

忠隣の死は衝撃的ではあるが、今は悲嘆にくれている暇はない。秀吉の先鋒隊は、一日で追いつく程身近に迫っているのだ。主だった武将たちは、着替えと夕食を済ませ、一息入れると、疲れた体に鞭打って、留守隊と共に軍議を開いた。

「昨夜は、先鋒隊が八代まで参ったということでございます。さすれば関白殿は、今夜八代でございましょう。十何万という兵が我等の通って来た険しい峠や崖っぷちの細い道を通っては来れる筈はありませぬ。多分船ということになりましょう。」

「船を用意して、あれだけの軍勢ともなりますと、ここまで十日は掛かりますな」

「いや、今までの動きから考えると、先発はもっと早まりそうじゃ」

「どちらにしましても、我等には迎え撃つ力はありませんな」

もとより忠永は厭戦気分である。これは降伏するしかないと衆議一決したのだった。

実際に、秀吉はすでに十九日に八代に到着していた。ここで四日の休養をとり、その間に主力軍を佐敷（芦北）に集結させ陣容の改編、補給を行った。ここで大船団が編成され小西行長、脇坂安治、加藤嘉明らが指揮をとり、海路を阿久根から川内川河口へと向かった。

秀吉は、親衛隊と陸路を南下し、田之浦に一泊して、二十五日佐敷に着いた。この夜は、帰順して来た人吉城主相良頼房を謁見した。

翌二十六日は快晴であった。用意された船で、不知火の海の景色を愛でながら、まだ日も高い内に水俣に上陸した。相良氏の旧臣が島津軍の十八

の首を献上し、秀吉は満足気にそれを眺め、感状を与えた。また博多の豪商神谷宗湛が、陣中見舞いに訪れた。

二十七日朝六時、秀吉は石田三成以下の幕僚に神谷宗湛も加えて、出水に向かって出発する。

秀吉が出水に向かったとの報に、忠永は緊張した。すでに日向の義久は、秀長に和議を申し入れ受け入れられたとの知らせも受けていた。この際、攻められて帰順するよりは、迎えに出たほうが心証はよくなるのではないだろうか。

彼は供回り十二人と、甲冑を着けずに幟、旗各一本と馬印を伴って国境の丘に駆け登った。この日はどんよりと曇り、今にも泣き出さんばかりの空模様であった。

丘の上の風当たりの強い中を、一刻（二時間）も待ったであろうか。遠くに秀吉の一行が見えた。人影を認識出来るほどになった時、忠永は大きく白旗を振らせた。そして少し坂を下ると、馬から下りて道脇に畏まった。

秀吉の馬印が止まり、赤い陣羽織の馬上の武者が忠永を見下ろした。

「島津又太郎忠永にござります。出水へご案内に参上いたしました」

「それはご苦労である」

頭上に野太い大きな声がした。はっと見上げると、美髯をはね上げた中年の恰幅のよい武将であった。

「はっはっは。殿下は船じゃよ。船。わしは影武者じゃ。まあ似ても似つかぬ影武者じゃよ。はっはっは。このような海縁りの細い道を殿下が通られると思うたか」

忠永の顔色がさっと変わった。ただ馬印の動きを見ただけの間者の通報を鵜呑みにしていたのは迂闊であった。

屈辱に歪んだ顔を家来が見ているのを気にとめるゆとりもなく、忠永は無言で先導をつとめた。

秀吉は米ノ津で下船して、影武者隊と合流した。忠永は秀吉の前に平服して、再度同様な口上を述べた。屈辱の思いは頂点に達していた。

出水城下に入った秀吉は、稻荷山に陣を敷くことにした。得意の急こしらえの館は、太い柱など金に任せての最高の材質であり、夕刻までに宿舎は形作られた。広間の上段には、金欄の陣羽織を羽織った秀吉が、無造作にあぐらをかいている。忠永は、それまで考えていた以上の、金二十枚と米五百石を秀吉に献上した上、人質として、次男虎松丸を差し出す旨を言上した。予想以上の秀吉の権勢に打ちひしがれた思いであった。青ざめたその顔は、一族の存亡を賭けて、必死の表情である。

秀吉は、本来の気性として一戦も交えず降参するような武将は好まない。しかし、船旅を楽しみ、影武者を務めた近習の首尾に大いに満足していた秀吉は、ご機嫌であった。これらの献上品にも満足であった。米はこの大軍には何よりの必需品である。

「うむ、うむ」と軽く頷いた秀吉は、三間も下がってかしこまっている忠

永に、鷹揚に所領を受け入れて、忠永の所領を安堵する旨を告げた。

それからの秀吉は出水に留まり、悠々と茶の湯を楽しんだり、手紙の返事を書いたりして、先に船で川内（せんだい）に向かった主力隊の報告を待っていた。島津氏の全面降伏は疑いないと思っていたのだ。

ところが平佐城主桂忠昉（ただあきら）が城にたて籠もって、頑強に抵抗していると早馬が知らせて来たのだ。忠昉は、新納忠元らと肥後から人吉、大口を経て二十四日に平佐にもどったばかりであったが、兵三百をもって秀吉全軍を迎え撃とうとしていた。

入来清色城主入来院重時は、信頼する家臣数十人とともに平佐城に入城した。近隣の豪族や、百姓もそれに加わって、山よりの平地にあるただの丘にすぎない平佐城にたて籠もったのだ。そんな小城を小西行長、脇坂安治、九鬼嘉隆などの名うての将が、大軍を率いて取り囲んだ。そして二十八日には、壮絶な死闘が繰り広げられたのだ。

抗戦する桂忠昉に手こずっているという意外な報告に、秀吉は立ち上がると、

「猪才な者共め。一気に押しつぶせ。総攻撃じゃ。わしも川内に参るぞ」

と大声で叫んだ。

秀吉は川内河口に軍を集結させ、川の北岸の丘に大軍を配備するように命じた。そして次々に兵を上陸させ、攻撃の準備を整えたが、その諸隊の陣地たるや十二軒四方にも及んだといわれる。

秀吉は忠永も引き連れ出水を出立した。そして阿久根に一泊、高城（たき）に一泊し、五月三日には川内の泰平寺に本陣を敷いた。

川内は古代に薩摩の国府の置かれた地であり、総州家六代太守師久、七代太守伊久の居城のあった北薩の中心地である。ここまでを秀吉に押さえられたということは、義久、義弘に決定的な敗北感を与えた。

五日夕、日向の豊臣秀長より、島津氏が降伏を申し出たとの知らせが入った。ここに秀吉は全軍に休戦命令を出したのだ。

義久は死を覚悟して鹿児島に退いていた。そして秀吉に降伏し謁見するため、五月六日鹿児島を発った。

義久は途中、伊集院にある母雪窓の墓に参った。墓前に額ずくと暫く身動き一つしなかった。まだ十才のとき、忽然と散った美しい母に対する秘かな思いが、死を覚悟した彼に取らせた行動だった。母は入来清色城主入来院重聡の愛娘であった。この雪窓院へ参るのは、母の三十三回忌のとき以来の十一年振りである。その当時は男盛りで充実し、自信に満ち溢れていた。たった三ヶ月前までは、九州統一もあと一息と思われた。それがこの尾羽打ち枯らした様はどうだろう。従い着いてくる者は、たったの十余人である。

義久は、近くの禅寺の住職に頼み、雪窓院の堂内で得度、剃髪し僧籍に

入って龍伯と号した。

五月八日、いよいよ秀吉に拝謁である。当日の泰平寺の境内には、新しい陣幕が張り巡らされ、白砂が敷きつめられた。秀吉は居並ぶ諸将の中央の床几に腰を下ろしている。義久には、供は小姓一人、丸腰でという条件であった。墨染めの衣を纏った義久は、秀吉の前に跪いた。

「その方、度々の公儀申し付けにも関わらず、刃向かいしこと不届き千万である。本来ならば切腹申しつけるところなれど、鎌倉どのより続きたる家柄を絶やすのも如何と存じたる故、一命は安堵して使わず」

秀吉は、彼の目前に悄然と座している義久に大声で告げた。

「これまでの不心得、深くお詫びいたします。存分のご処分あってしかるべきと心得ますに、一命をお助けくださいます由、今後は身命を賭して忠節を尽くすものにござります」

流石に天下を掌握した秀吉である。人となりを見抜くことは天才的であった。義久がただ者ではないこと、裏表のある卑怯な人物ではないことを感じると、忽ち味方に引き入れることにするのだった。彼はつと立ち上がって

「これへ、これへ」

と義久を招き寄せ、腰に帯びていた大小を抜き取ると、大刀の方を差し出してこれを授けた。酒は先ず秀吉が啜ってみせ、それを義久に与えた。

義久は、自分の敵将に対して行ってきた仕打ちとの相違に、目から鱗が落ちる思いであった。そしてこの小柄な男の放つ不思議なオーラに魅了されたのだった。

翌日、義久は人質として娘の亀寿と義弘の子で自分の養子にしていた久保を差し出した。代わりに秀吉は義久に薩摩一国を与えるという朱印状を渡した。

降伏が受け入れられた以上、もはや無駄な戦死者を出してはならない。義久は桂忠助に降伏を命じる早馬を送った。忠助も主命ならば致し方ないと、ついに開城に応じたのだった。

翌日、桂忠助が拝謁にまかり出た。秀吉は孤軍奮闘した忠助の勇気を褒めて、名刀宝寿を授けた。島津の武将は、初めて接した秀吉の磊落な心の広さに驚き感じ入った。

その後秀吉は、北薩を横断して曾木に至り、義弘はそこで謁見した。義弘の弟歳久は、病を口実についに拝謁にまかり出ることはなかった。この事が後の悲劇につながるとは誰が気付いたであろう。

秀吉は大隅を義弘に、日向諸県郡を久保に与えた。その後大口まで行った。そこで新納忠元を謁見し、敵ながら勇気ある活躍に褒美を与えた。

この時も、秀吉は気さくに後に立てかけてあった槍の白刃の穂を外して、忠元を近くに寄らせて授けたのだった。帰って若者どもに様子を聞かれた忠元は、

「我等が敵対で来るようなお方ではない。本当に恐ろしくて体が震え

た」

と言った。

秀吉は、博多に立ち寄り、そのの復興を命じたのち、京都へ戻ったのだ。今までの歴戦の経験から、義弘をはじめ諸将は、思い掛けぬ秀吉の寛大さに深く恩義を感じたのであった。彼らは未だ秀吉に、大量の人命を虫けらの如く踏み潰し得る冷酷さが培われていることを体験していない。

秀吉が去り、再び島津の支配下になった薩摩であったが、人心は旧に復した訳ではなかった。

出水の忠永は、そのまま旧領を安堵されていたが、豊臣軍と一戦も交えることなく降参したことに、周囲の眼は冷たかった。

そもそも高田城で迎撃して守れとの命令にも関わらず放棄したとは何事か。島津征久、新納忠元らが、すぐ近くで戦って踏ん張っていたとき、何の力にもなってやらなかったではないか。義久、義弘が秀長に和を乞うたからと言っても、それは戦って、立ち上がれないほどの損害を被ったからであって、戦力があればもっと頑張ったに相違ない。

忠永に引きかえ桂忠昉、新納忠元はどうだろう。果敢な働きに対し「敵ながら天晴れと関白様もお褒めになった。見上げたものだ」

と巷間でも話題になっている。

こうしたひそひそ話は、忠永と平御前の間にも微妙な影を落とした。平御前としては、例え一矢たりともわが子忠隣の恨みに報いてほしかった。一戦も交えなかったのでは、父義久にも申し訳ないではないか。

「忠永殿、あなたのご決断で、我等は無事に過ごすことが出来ましたなあ。それは有難いこととは存じますが、平としては、やはり一矢報いてほしゅうございました。過ぎたことを愚痴言うても詮無いこととは、重々存じておりますがなあ」

自尊心が強く繊細な神経の主忠永自体、降伏のときの人知れぬ屈辱を思い出すと、身の置き所もないほどの悔しさに震えた。彼は寡黙になり、気性も荒くなった。そして、義弘や諸将の前に出ることを恐れるようになった。叱責を受けずとも、刺ある視線に包囲されることは確実と思われた。忠永は、義弘を憚って、名字を出水を縮めて泉とし、忠永改め忠辰（ただとき）、泉又太郎忠辰と名乗ることにしたのである。

こうして出水の城に閉じこもった忠辰は、興味を眼前の海に向けた。

出水の前に横たわる湖のように穏やかな不知火の海には、近くは長島、その先には複雑な海岸線を持つ美しい天草の諸島が横たわっている。その影に潜む水軍たちは、倭寇、海賊とも呼ばれる神出鬼没の者どもである。彼らは、出水や阿久根に寄港して、安全と引換えに略奪してきた明や南蛮の品などを献上する。それは忠辰の財政を陰ながら潤わせるとともに、彼に南蛮の品や味を通してまだ見ぬ遠い国々を夢見る楽しみを与えていた。ギヤマンの杯に赤い酒。そこにはこの重苦しい日々を忘れさせる何かがありそうである。

秀吉は、薩摩から戻る途中博多に立ち寄った時、突然キリシタンの禁教令を発し、宣教師を追放した。表面的には突然であっても、その原因はいろいろ考察される。キリスト教弾圧の原因は慶長一年八月(一五九六年十月)、サンフェリーペ号が土佐の浦戸(高知県)に漂着。乗組員フランシスコ・デ・サンタが、キリスト教を広げることによって、信者の地を植民地化するというスペインの植民地政策に言及したことによるとされているが、それよりも十年近く前の話である。秀吉は北九州の状況を目にしてから、南蛮人の目的を肌で感じ取ったのだろう。

布教は禁じても、外国貿易を独占して莫大な利益を求めていた秀吉であった。明からの抗議もあって、明船の安全を守るため、天正十六年七月八日厳しく海賊(倭寇)を取り締まるよう大名に命令した。

しかし忠永は、特に手を下し弾圧することはなかった。翌年四月、石田三成、細川幽斎が島津義弘に督促したので、義弘は老臣伊地知増也に出水の海賊の捕獲を命じたのだった。このような処置を必要としたことは、忠永の怠慢である。これは秀吉にも義弘にも忠永に対する不信の念を深めさせることになった。

自分の成功に神がかり的な自信を持っていた秀吉は、九州平定の計画以前から、海外制覇を夢見ていた。彼は、折々に側近にその旨を洩らして、朝鮮王や植民地の総督などに入貢するよう手紙を出していたのだ。

天正十九年十月、小田原の北条氏を滅ぼして、日本統一をなし遂げた秀吉は、九州征伐の延長のような感覚で、朝鮮出兵を命じた。そして九州の大名たちに肥前名護屋に築城を急がせた。

この年の暮れ、秀吉は関白職を養子秀次に譲って、太閤を称することになる。

義久は手勢を連れて名護屋に行き、諸大名と共に築城工事に従っていた。途中一旦鹿兒島に戻った六十才の義久は、間もなく病に臥せり、代わりに義弘が名護屋へ赴いた。しかしその義弘も、翌年の正月には朝鮮出兵の準備のため栗野城に戻らねばならなかった。義久、義弘、久保、忠元に渡海命令が出されたのだ。寛大と思われた秀吉の彼らに対する処置は、このことを念頭においてのことだったろうか。

軍役は九州、四国の大名には高一万石につき兵六百を、中国は五百、畿内は四百、東海は三百というように、朝鮮との位置関係で決められ、膨大な兵糧の徴集も命じられた。島津義久は兵一万五千を申しつけられた、島津の支配下であることを認めた琉球にも兵七千と十ヵ月分の食料が課せられた。

しかし、島津氏の領内はまだ先年の戦の消耗が大きく、この莫大な動員に応ずることはとても不可能であった。結局何とか兵一万に、琉球は食料

だけに減免してもらったものの、それとておぼつかない状態であった。

三月一日が秀吉出陣と決まった。諸大名は競って美々しく隊列を整えて、名護屋に参集する。義久は体調が思わしくなく、取りあえず義弘とその子久保が対馬に渡海することになった。

二月二十七日栗野で兵を募り出発したが、義弘に従う者は二十三騎に過ぎなかった。大口で久保、新納忠元と合流するが、忠元も病気で子の忠増が出陣することとなった。こうして態勢は何も整わぬまま、後続を頼みに出発したのであった。

義弘の一行は貧しい民家に泊まったり、小さな舟でしぶきに濡れながら川を渡ったり、雨の中、焚く薪もない小さな民家で、濡れたいらくさを燃やして狸のように燻されたりと散々な目に合いながら、ようやく三月二十日名護屋に着いた。すでに築城のために名護屋に来ていた本田因幡守、町田出羽守が出迎えた。これらの手勢を集めても、とても一万には程遠かった。しかも夜こっそりと帰国してしまう者もいたのだ。

先発隊小西行長らは、すでに三月十二日には対馬に集結していた。島津軍は四月七日、壱岐までは渡ることが出来た。しかし後続部隊は全然来ない上、対馬に渡る船もなかった。

漸く敷根藤左衛門の船一艘が回って来たので、十七日久保が先ず対馬に渡った。折り返しを待って二十一日義弘も渡った。四〇日も遅れた到着だった。しかし後の家来どもは置き去りで、平戸まで使いをやって、やっと二艘の船を借りて渡ったという情けない有り様だった。

出水の島津忠辰にも秀吉から朝鮮出撃の命令が下った。義弘の指揮のもとで参戦するということであった。出陣することに文句を付けるわけではないが、義弘の下で生死を懸けて戦うということに、忠辰には強い反発があった。義弘の忠辰に対する不信、反感は十分分かっていたのである。戦の消耗を受けなかった彼は、ゆっくりと万全の準備をした。立派な船で六百の兵を率いて、阿久根の港から朝鮮を目指した。

そして彼は秀吉に手紙を書いた。

「私は太閤様が薩摩に御下向のみぎりには真先にご協力いたしました。この度のご征伐に参戦いたしますことは、誠に誇りとするところであります。願わくば、義弘の配下ではなく、殿下の直接の部下として働かせて下さい」

しかし秀吉は、こうした我が儘な申し出は大嫌いであった。与えられた部署で最善を尽くすことが肝要なのである。大体何も刃向かうことなく降参したこと自体、主君に何の忠義も行っていないことの証明である。最初の手紙は握りつぶされた。

忠辰は、他の大名軍と集結することなく、直接壱岐、対馬と進み釜山に着いた。そこで前回と同様な手紙を再度秀吉に送った忠辰は、病気だと偽って、上陸せずに乗船したまま秀吉の返事を待った。

義久もやっと腰を上げた。五月十八日串木野を出港し甑島を経て、六月五日名護屋に着いた。そして翌日、石田三成らと壱岐に渡った。そしてその直後の十五日、秀吉に衝撃を与えた梅北国兼の反乱が起きたのだ。

梅北国兼は大隅湯尾の地頭で、

「この朝鮮征伐の戦は無謀なばかりでなく、重い軍役は堪えがたいものだ、太閤を倒さねば郷里は救われない」

と思った。それで秀吉を斬ろうと島津の家臣に呼びかけたのだ。

入来院重時にも義弘から出陣の命令があった。しかし重時も病気ということで、渋谷一族の入来院重興と家老の東郷重彰に兵百五十を二隊に分けて出発させた。重興は朝鮮に赴き義弘の下で働いたが、重彰は梅北国兼に同調した。

国兼らは、佐敷城を陥れ、八代へと北上した。しかし同調者の田尻荒兵衛父子は撃退され二百の兵とともに討死した。佐敷城にいた国兼は酒宴の席で、偽って陣中見舞いとして来ていた留守隊の者に殺害されたといわれている。東郷重彰及びその部下全員は追撃隊によって佐敷で殺された。国兼の妻は名護屋の刑場に引き出され火あぶりにかけられた。

入来院重時に厳命が下った。東郷重彰の父重定と部下七十五人の家族全員を誅し、その首を差し出せとの命であった。渋谷氏が関東から下向して以来、このような苛酷な処罰が行われたことはなかった。信長、秀吉の行ってきた残酷さが、この薩摩に持ち込まれ、行われたのだった。この事件は深く秘され、未だに地元でも知る人もない。

しかしこの処罰で全てが終わったのではなかった。梅北の反乱の中に、義久、義弘の弟歳久の部下が大勢いたということで、秀吉は義久に、歳久の首を差し出すよう厳命したのだ。

この辛い命を受けた義久は、桜島の雄姿を臨む竜ヶ水に於いて歳久を死に追いやった。歳久の首は一条戻り橋に曝された。

戦いの当初は日本軍が優勢で、朝鮮の二王子を捕虜にするなど、奥深く進軍したのだが、やがて明軍の応援隊が到着すると形勢は逆転した。それに水軍は圧倒的に朝鮮が強く日本軍は補給路を断たれることもしばしばとなっていた。

秀吉は七月に母北政所が亡くなって伏見に帰り、名護屋に戻ったのは十月であった。その頃から日本軍は暫時撤退が始まっていた。一際寒い朝鮮に出兵していた兵士たちは、食料の欠乏に悩まされるようになっていた。三月前とは様相がすっかり変わってしまっている。

正月になった。京城は飢饉であった。秀吉は焦って三月には自分も渡海すると宣言し、船を回すよう求めたが、船舶の不足に加えて船頭も病死者が多く、なかなか命令通りには行かない。朝鮮民衆の反感も相当きびしいものがある。日本兵の中にも逃亡するものも増えて来ていた。四月も半ばともなると、和平を模索する動きも出始めた。

こんな中では、臆病者ほど秀吉の逆鱗に触れるものはなかった。五月一日、消極的な三武將を厳罰に処するとの布告が、全軍になされた。すなわち大友豊後守、波多三河守、島津忠辰の三氏に対してのものである。それぞれの武將は捕らえられ、毛利、黒田、小西の諸武將の陣に預けられたのだった。

同日、島津軍の主將義弘にも、忠辰の知行は召し上げ、小西行長に預ける旨の秀吉からの信書が届けられた。

小西行長の陣に預けられた忠辰は、唐島に幽閉されたが、まもなく病没した。病没というのも不自然なことであるし、忠辰の妻と子が名護屋で処刑されたというからには、本人は毒殺または詰め腹を切らされたのであろう。今はただ忠辰の妻虎の墓らしきものが名護浦にひっそりとあるばかりであるという。

文禄二年の夏は、ことの他暑かった。ギラギラとした陽射しの中を悄然と一団の軍船が福の江港に帰港した。今は亡き忠辰の遺骨を守って、戻って来た家臣たちであった。しかし彼らには迎える群集もなく、戻るべき城もすでになかった。

新代官として、肥前唐津城主高島新蔵が着任し、忠辰の一族や家臣は全て追放されていた。

家臣たちには、帰るべき家もなかった。薩州家代々の菩提寺に埋葬することもかなわなかった忠辰の遺骨は、藪蚊の群れる塚に葬られた。そして最後まで遺骨と共にあった家臣たちは、その近くで追腹を切って無念の自害をしたという。

今に残る三百塚である。

こうして薩州宗家島津氏は断絶した。

忠辰の領地は細川幽斎 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B4%B0%E5%B7%9D%E5%B9%BD%E6%96%8E> と石田三成に分与された。

忠辰の三人の弟は、出水で捕らえられた。母平は義久の娘であり、子供たちは義久の外孫である。三人は宇土の小西行長の城に預けられた。平は九年後の慶長七年、上井（国分）で亡くなったことが、入来村史に載っている。

中の弟忠富は、十五才であった。翌年小西行長に従って朝鮮に戦ったが、その後義弘に仕えた。慶長五年、関が原では最後まで義弘の身近にいて彼を守った。この時、入来院重時は戦死したが、彼には男の子がいなかった。義弘は慶長十一年、重時と、彼が再婚した歳久の娘蓮との間に生まれた鶴が十三才になったのを機に、忠富を入来院家の養子にして娶わせた。忠富は、名を重高と改め入来院家十六代を嗣いだ。

重高も鶴も、奇しくも入来院十一代重聡の玄孫に当たる。

かくて薩州島津家は断絶したが、入来院宗家として連綿と入来の地に現代まで続くのである。